

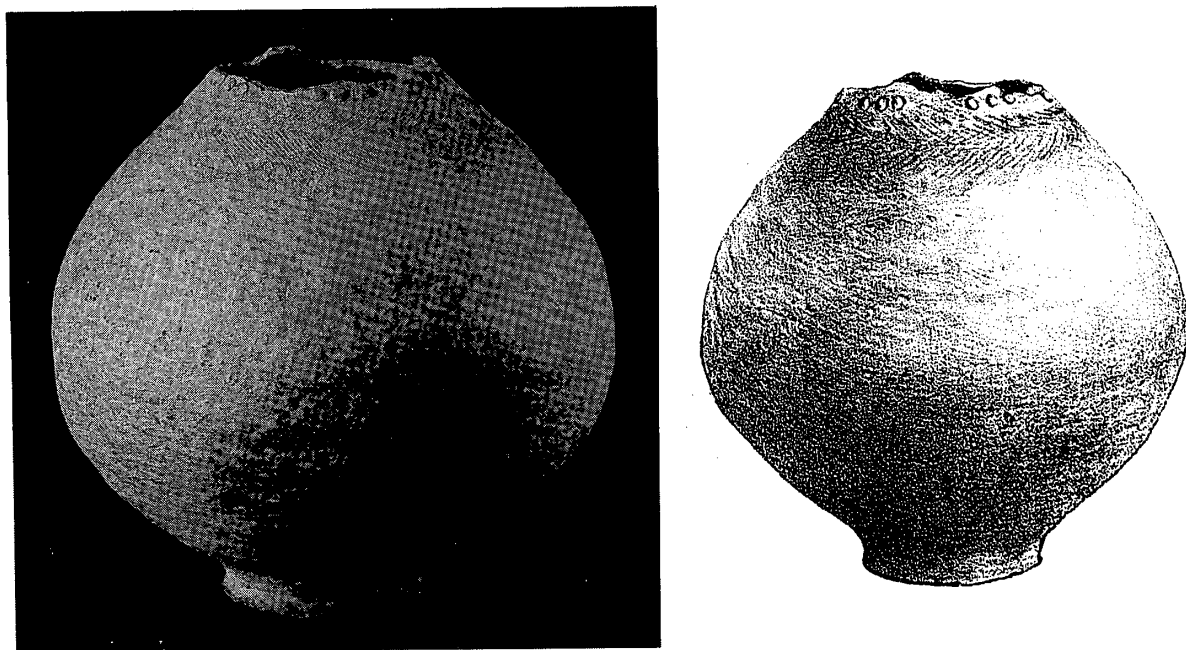
弥生町の壺と環濠集落

鮫島 和大

1. はじめに

一昨年、著名な弥生町の壺形土器（第1図）を観察する機会を得た¹⁾。「弥生式土器」あるいは「弥生時代」という名称の由来となった向ヶ岡弥生町で発見されたこの壺形土器は、現在、東京大学人類学教室に保管されている。有坂鋁蔵氏がこの壺を発見したのは1884年（明治17年）のことであり、すでに百十年余が経過しているが、『最初の弥生土器』としてのその学史的意味あいはいは色褪せてはいないし、この土器に製作者が刻んだ数々の情報も変わっていないはずである。しかし、この発見にちなんでつけられた「弥生町式」の型式名称も、南関東の後期弥生土器の編年を見直す動きの中でしだいに使われなくなってきているこんにち、土器は陳列ケースの片隅で一人余生を送っているかのようであった。

時代の名称に冠され、型式名としても名を馳せた「弥生町の壺」（以下この最初発見の壺をこう呼ぶ）であるが、近年その考古遺物としての特徴が顧みられたことはない。むしろ、人々の関心はひとときこの壺がどこから出土したかということにあった。「弥生町の壺」は、向ヶ岡貝塚から出



第1図 弥生町の壺（左写真）と坪井氏の報告に載せられた同壺のスケッチ（右、実物の1/4）

土したと考えられているが、不明になっていた向ヶ岡貝塚の位置（坪井正五郎氏が向ヶ岡貝塚の報文に載せたスケッチに描かれた「貝の散布している位置」）を発見者の有坂紹蔵氏やそれを発表した坪井正五郎氏、再度その位置を紹介した中山平次郎氏等の記録を読み解き、特定したのは太田博太郎氏であった（太田1965a, b）。一方、1975年、この場所とは異なる東京大学浅野地区内の発掘調査で弥生時代の環濠が検出され、弥生土器と貝層が検出された。調査に携わった佐藤達夫教授は有坂氏が壺を発見した地点はこの貝層であると考え、向ヶ岡貝塚と推定される地点とこの貝層の地点が異なる（両者は直線距離で200m以上離れている）理由として、発見の後の有坂氏と坪井氏の関係を挙げ、有坂氏が坪井氏に壺の出土を明かさなかったととれるやや穿った見解を示した（佐藤1975）。この見解は後に太田氏の反論を呼ぶ（太田1981）が、1979年に刊行されたこの調査の報告書では、弥生後期の遺構・遺物に基づいた調査の成果と向ヶ岡貝塚あるいは弥生町の壺の関係についての考察は無く、それに代わるように、先の佐藤教授の遺稿が再録されている。この間佐藤教授が故人となられてしまった事情を鑑みると、その心情は十分に理解できるのではあるが…。この東京大学調査地点（以下同）の報告書名は『向ヶ岡貝塚』として刊行されたが、その間「弥生二丁目遺跡」の名称で国の史跡に指定されている。こうした経緯も、あるいは、研究者をして「弥生町の壺」自身を資料として分析の俎上に乗せることを躊躇させているのかも知れない。

近年、武蔵野台地東部の弥生時代の集落の調査が進み、後期の環濠集落と非環濠集落の問題、東海地方東部からの土器の移動の問題等々が南関東弥生時代後期研究の主要な関心事となり、問題点が明確化しつつある。特に、武蔵野台地東部は南関東の中でも環濠集落が集中し、環濠集落から出土する土器の特殊性、とりわけ東海地方東部の菊川式、登呂・飯田式等との関係が注目されている。このような現在の弥生後期研究の動向の中で、「弥生町の壺」と遺跡としての向ヶ岡貝塚（弥生二丁目遺跡）はあらためて注目すべき内容を持っていると考えられる。

1975年の東京大学の調査は、「最初の弥生土器」に関わるという「考古学の歴史」の上での関心とは別に、現在の視点から、環濠の一部を検出したという点でその環濠に囲まれる集落全体の性格に関心が払われる。「弥生町の壺」もこの環濠集落と何らかの形で関係を持つことは想像に難くない。

「弥生町の壺」は文様も比較的簡素であり、これといった特徴を持っていないかのようにみえる。しかしこのような土器が作られたこと自体に、環濠集落という特殊な遺跡の性格、また、そのような遺跡が集中するこの地域の性格が現れているのではないかと考えるに至った。やや特殊な事情ながら標識資料として扱われていたにも関わらず、今一つ位置づけの定まらなかった「弥生町の壺」であるが、今回の観察を機会に再び分析の俎上に載せて紹介しようというのが小文の主旨である。

2. 弥生町の環濠集落と向ヶ岡貝塚

弥生町の壺形土器は向ヶ岡貝塚から出土した、というのが従前いわば前提であった。しかし、東京大学の調査での環濠の検出は、事実、地点貝塚にとどまらない弥生時代のこの遺跡の展開と性格

を推定させるものであったはずである。環濠集落については当遺跡の位置する武蔵野台地東部でも、その全体像をほぼ明らかにした調査例もあり、弥生町例についてもある程度の推定ができよう。ここでは、まずこの弥生時代の遺跡を「弥生町の環濠集落」あるいは「弥生町の弥生集落」として、全体像をつかむことにつとめ、そこでの発見がどのようなことだったのかを考えてみたい。

1) 弥生町遺跡群の環境

武蔵野台地の東部は、北東部の荒川・入間川の氾濫原と南西部の多摩川の氾濫原によって挟まれ、南東部は東京湾に面する形で独立した地形を持っている。弥生二丁目遺跡群の位置する上野・本郷台地周辺は、荒川・入間川流域と東京湾岸との交差点にあたり、水上交通の上でも重要な地点として挙げられるが、遺跡は両台地の間を流れる藍染川を台地先端から1km少々遡った、本郷台地の東縁に位置する²⁾。

弥生二丁目付近は、台地が根津の谷に向かって張り出した形になっており、その不忍池側の基部から北東方向に向かう谷³⁾が開析している。また、この谷から北方に向かって一段低い部分が続いて崖線のやや奥まった部分の方へ抜けているが、これは根津の谷の下刻が進む初期につくられ、台地上に残された微地形と考えられる。この結果、根津の谷に張り出した部分が一段高台になり、本郷台地本体とは半ば独立した小丘になっている。

弥生時代の周辺の遺跡(第2図)としては、まず、弥生時代中期後半から断片的な資料が散見される。東京大学人類学教室倉庫跡(中谷1923)からは、有角石斧が発見されており中期に遡る可能性が考えられる。また、千駄木遺跡(菅原・中津1989)の後期の方形周溝墓から宮ノ台式の壺の口縁部破片が検出されている。集落として明らかなものは、やや離れるが荒川区道灌山遺跡(滝口・玉口他1955)、北区飛鳥山遺跡(宇野1967)が知られており、いずれも環濠が調査されている。

これら中期の遺跡と弥生町の環濠との間を埋める資料は現在のところ弥生町周辺にはないが、東京都と埼玉県の境界付近の荒川低地を望むやや奥まった台地上に、白岩式土器の特徴を持つ土器を出土する、四葉地区遺跡(小林・山村ほか1988)、花ノ木遺跡(埼玉県埋蔵文化財事業団1994)などがあり、これらの遺跡ではさらに東京湾岸の古い様相(いわゆる久ヶ原式)に類似する土器と菊川式土器の特徴を持つ土器を出土する遺構が検出されていることは注目される。

弥生町の環濠から一括出土した土器は、後述するように現状では後期の比較的新しい段階と考えられるが、これらの遺物は環濠がある程度埋まった後廃棄されているので、環濠の掘削自体はこれより遡る可能性がある。後期の環濠集落で現在確認されている弥生町遺跡から最も近いものは九段上貝塚例で、直線距離2.5kmほど離れているが、このほか環濠集落として下戸塚遺跡、赤羽台遺跡、四葉地区遺跡B区、根ノ上遺跡などが比較的近くに位置するものとしてあげられる。

弥生町に近接する後期の遺跡は、千駄木遺跡(前掲、水山他1989)、上野公園内・新坂遺跡(有坂1923、上野公園の北東隅とあるが正確な位置は不明)、動坂遺跡(佐々木他1978)などがあげられ、特に千駄木遺跡では、住居跡とともに方形周溝墓が検出されているが、弥生町遺跡の谷を挟んだ北側にあたり、弥生町の環濠集落成立後、ここから拡散した集落である可能性も考えられよう。



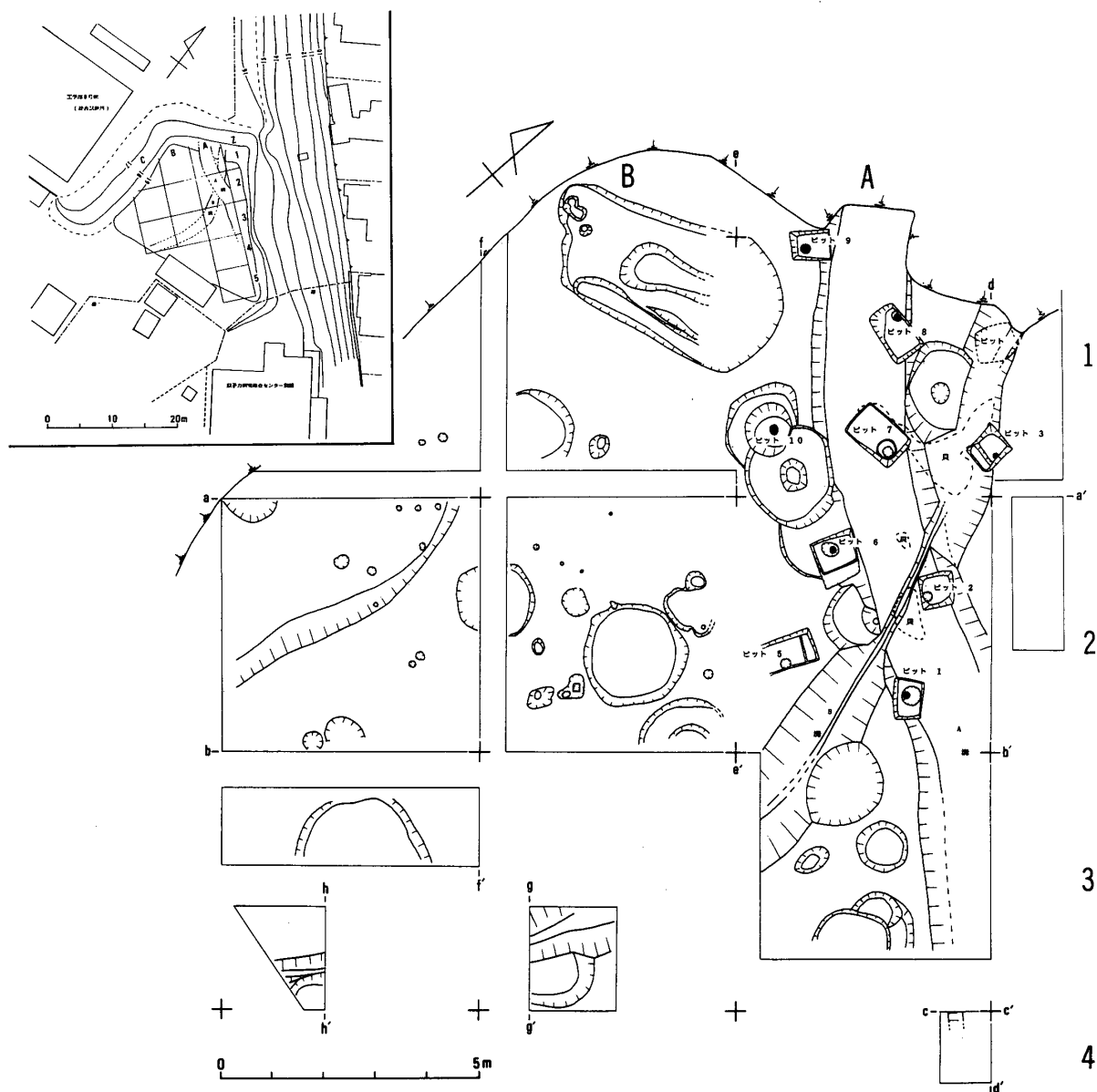
第2図 弥生町遺跡と周辺の遺跡 (二万分の一迅速図「下谷区」明治13年測量)

後続する古墳時代前期については、近年東京大学附属病院内の看護婦宿舎地点、MRI棟地点の調査において集落が検出されており⁴⁾、浅野地区から谷を挟み不忍池を臨むこの台地上にかなりの軒数の住居跡が存在していたと考えられる。また、浅野地区内タンデム建設予定地の試掘調査⁵⁾においても、古墳時代前期の住居址が確認されており、浅野地区内にもこの時期の集落が広がっている可能性がある。

2) 環濠の調査と環濠の復元

1975年の東京大学の調査(以下東京大学調査、東京大学考古学研究室編1979)では弥生時代の環濠と考えられている2条の溝状遺構が検出された(第3図、第4図1)。このうちB溝とされたV字溝は、遺物の出土状況から見ても明らかに弥生後期に属する環濠である。調査では環濠の一部が

弥生町の壺と環濠集落



第3図 向ヶ岡貝塚（東京大学調査地点）の発掘区全測図（東大考古学研究室編1979より転載）

検出されたにすぎないが、環濠は集落を囲んで巡っている可能性が強く、その集落はかなりの面積を占めるはずである。図からわかるように、B溝は調査区内で弧を描いて北方と西方に延びているが、これが集落を囲むとすると、集落は調査地点の北西側に展開すると考えられ、推定される環濠全体から見れば、調査地点はその南東コーナー部分にあたると考えられる。

もう一方のA溝は断面逆梯形を呈し、発掘区内では崖線に沿ってほぼ北西から南東に抜けるが、B溝を切って構築されている。報告書では、「V字溝埋土上部に形成された貝塚は、弥生町式の土器片のみを含んでおり、それらが新しい逆梯形溝のそこに流れ込んでいた」、「逆梯形溝の底部、および同溝底に堆積した貝層中より出土した土器片も、すべて弥生町式のものであった」ことなどから、「V字溝の掘削・廃絶・逆梯形溝の掘鑿という一連の行為は、同じ弥生町式の時期内に継起的

に行われたものだったのではないだろうか」とされている。しかし、調査地点はロームにまで達する攪乱を受けており、旧地表面はかなり高いレベルにあったと考えられ、報告書でも指摘されているように溝は確認された状況よりかなり深かったものと考えられる。これが埋まりきる時間やA溝底の遺物や貝層が同溝がB溝を壊して掘削された際の崩落によるものである可能性などを考えれば、B溝の掘削・廃絶・A溝の掘削が継起的であるかどうかの即断は躊躇されるであろう。しかしながらこのA溝も、さらに北西及び南東に延長するものであることは確実である。

現在、関東地方でもかなりの数の後期環濠集落の調査例があるが、面積や平面形には各々差異が認められる(第4図)。総面積が推定できるもので小さいものは殿屋敷遺跡例の約4,200㎡、大きいものでは赤羽台遺跡の約20,000㎡が知られる。平面形は、殿屋敷例のように台地上の平坦部を囲むように不整形を成すものもあるが、地形上の制約の少ない立地を持つ環濠では、赤羽台遺跡例や下戸塚遺跡例、そとごう遺跡例、やや不整ではあるが神崎遺跡例のように隅丸長方形を意図したと考えられるものが多い。また、台地縁辺部に立地する例ではその長辺を低地を臨む崖線に接して構築している傾向も赤羽台例、神崎例からうかがえよう。

こうした諸例から、弥生町の環濠について考えると(同図1)、地形の上では南東から入る谷とそれに続いて北に延びるやや低い部分以外にはあまり地形上の制約はないものと考えられる。まずB溝は南東コーナーの部分が確定しているが、西側の低い部分避けながら崖よりの一段高い部分のほぼ中央を占める隅丸長方形の形態をとれば、10,000㎡前後の規模が考えられようか。また赤羽台例程度の規模を当てはめるなら、この高所部分のかなり北の部分まで達する可能性も考えられる。いずれにせよその長辺はほぼ現在の崖線に沿って延びているものと考えられる。A溝については環濠であると考え、検出されたのはほぼ直線部分であるから、全体の規模については推定しがたいが、やはり長辺を崖線に接してやや南北に長く展開していたと考えるのが妥当ではなかろうか。

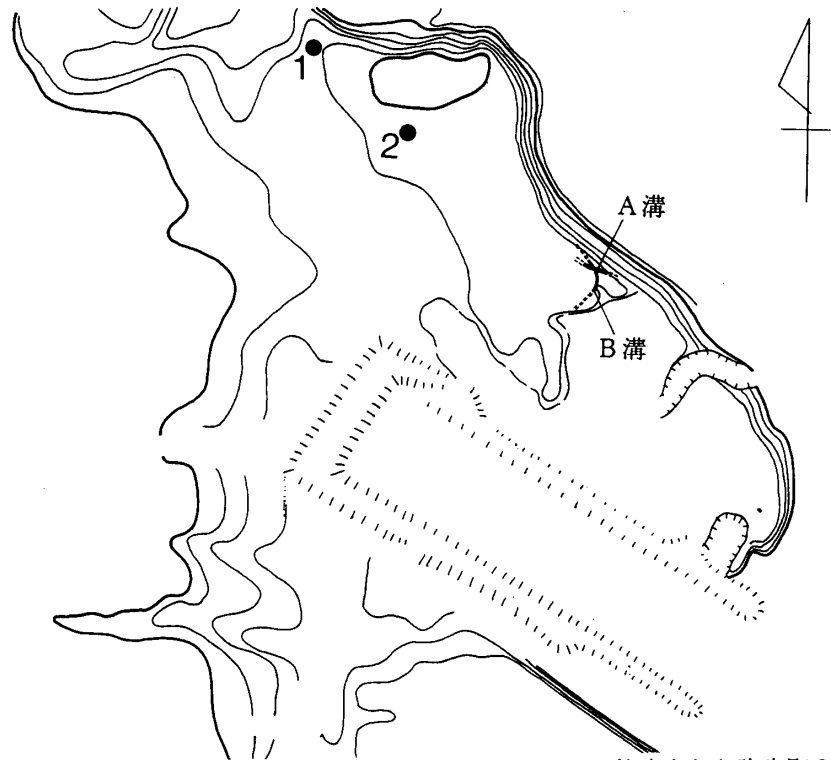
3) 環濠内の貝塚と向ヶ岡貝塚

B溝からは貝層が検出されており、この検出状態が佐藤氏のこの地点を弥生町の壺の出土地点と推定する根拠の一つとなった(佐藤1975)。報告では「貝層は厚い所で70cm位あり、中に、弥生町式の土器片のほか、灼骨を含む獣骨や魚骨も僅かながら検出された」と記されている。

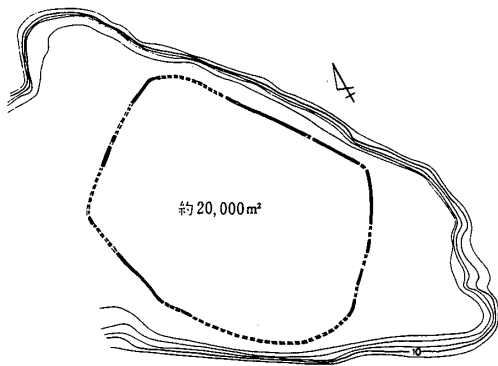
後期の環濠から貝層が検出された例は、北区赤羽台遺跡が知られており「ハマグリ・カキを主体とする貝層と灰層も数箇所検出されている」(愛知考古学談話会1988 p.604)とされる。また、集落を圍繞するものではないが大田区山王三丁目遺跡の条濠では「長さ292cm、幅52cm、厚さ43cmを測り、下部は溝底より70cmほど浮いた状態」で貝層が検出されている(佐々木1991)。東京大学調査の報告で「集落遺跡としての本遺跡の元来の規模を考えれば、既に破壊されている部分にも、同様の貝塚が形成されていたことは十分に考えられる」(前掲 p.34)という推定がなされているが、赤羽台例はこれを追認する実例として注目される。

また、環濠以外から貝層が検出された例は、大田区久ヶ原遺跡(甲野1930)、千代田区九段上貝塚(和島1960)でそれぞれ住居跡内の貝塚が知られている。同様の例は武蔵野台地外になるが市原

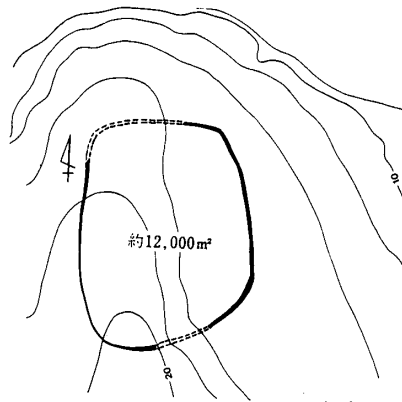
弥生町の壺と環濠集落



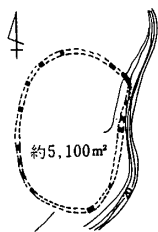
1. 検出された弥生町の環濠と周辺地形



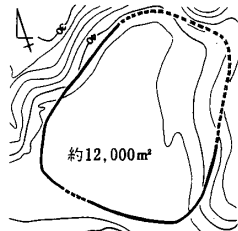
2. 東京・赤羽台



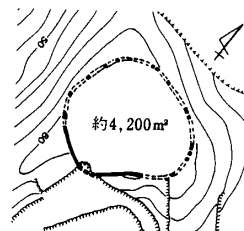
3. 東京・下戸塚



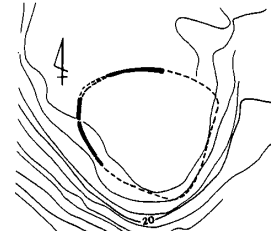
4. 神奈川・神崎



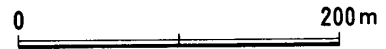
5. 神奈川・大原



6. 神奈川・殿屋敷



7. 東京・下山



第4図 弥生町の環濠と周辺地形及び南関東弥生後期環濠集落の規模
(1のコンタは参謀本部陸軍部測量図五千分の一東京図測量原図による, 2~7は車崎1991aより構成)

市唐崎台遺跡例（田中・鈴木1981）、中期の菊間遺跡例（中村・栗本1974）などがあり、弥生時代の東京湾岸の貝塚の一つのパターンと言えそうである。現在のところ環濠内と住居址内という二つの貝塚の形態が知られるわけだが、縄文時代の例に見られるような大規模な貝塚は、南関東の弥生後期には今の所知られていない。

以上のような諸例から考えれば、弥生町の環濠集落において、調査地点で環濠内から貝層が検出された事実に加え、赤羽台例のように、同様な貝層が環濠中の各所に点々と形成されていた可能性とともに、環濠集落に伴う廃棄された住居跡内にも久ヶ原遺跡例のような貝層が形成された可能性が指摘できるだろう。

このような弥生時代の貝層が推定されるのに対して、坪井氏が報告した向ヶ岡貝塚は縄文時代の貝塚であったようである。今村啓爾氏は、環濠の調査後、東京大学人類学教室に保管されている「向ヶ岡貝塚出土」とされる250片ほどの土器（坪井氏が報文に記した四点の破片を含む）がほとんどが縄文時代後晩期のものであり、早前期のものを多く混える東京大学調査地点と異なること、坪井氏の報告中の向ヶ岡貝塚の貝にハイガイが少なくないのに対し環濠中の貝層にはハイガイがないことあげて、環濠中の貝層が向ヶ岡貝塚ではないことを指摘した、というエピソードを記している（今村1988）。弥生後期の貝塚の貝にハイガイがないことは山王三丁目遺跡や久ヶ原遺跡の貝層についても指摘されており（金子1991）、少なくとも弥生時代の東京湾岸においてはこの傾向が認められるようである。後述するように、坪井正五郎氏が報文にスケッチを載せた向ヶ岡貝塚の貝の散じている地点は第4図1の図上1の地点と考えられ、坪井氏はここから貝を採集したと見るのが妥当であろうから、この地点の貝塚は縄文後晩期の貝塚であった可能性が高い。

また、江坂輝彌氏が「弥生町貝塚を再発見」したとして報告した地点（第4図1の図上2：江坂1938）も、縄文後期の土器が採集されているほか、貝の中にハイガイが含まれることが記されていることから縄文時代の貝塚と考えられるが、距離的にも向ヶ岡貝塚と一連の貝塚を成す可能性も考えられる。

以上のことから、現在の弥生二丁目周辺の貝塚についてまとめると、

- ①縄文時代の貝塚と弥生時代の貝塚が存在している。
- ②縄文時代の貝塚は第4図1の図上1の地点付近に後晩期を中心とする貝塚があって一定の広がりを持つと考えられるがその範囲は確定できていない。
- ③弥生時代の貝塚は東京大学の調査で環濠中に確認されており、同様の貝層の存在が推定できるが、そのような地点は推定される環濠集落の環濠の中あるいは住居跡の中に限定される可能性が高い。

ということができよう。

4) 向ヶ岡貝塚の「位置」と壺の出土地点

前節までに見たように、弥生町周辺は弥生時代・縄文時代、さらには先土器から古墳、近世の遺跡が散在する複合遺跡である。貝塚に限っても、各所にそれぞれの時代の貝塚が散在していると

弥生町の壺と環濠集落

いってよい。これまで、弥生町の壺が出土したとされる向ヶ岡貝塚の位置については、かなり限定された「地点」が追い求められてきたが、「弥生町の壺」を残した集落はさらに大きな規模で広がっていることをまず頭に入れておく必要がある。

前述したように、坪井氏が報告した向ヶ岡貝塚は縄文後晩期のものであると考えられる。弥生町の壺は胴部は完形を保っているから、廃棄された後原位置を動いたとは考えにくい。とすれば、向ヶ岡貝塚に弥生時代の遺構が絡んでいたなどの想定をしなければつじつまが合わなくなる。

しかし、冒頭に述べた佐藤教授のやや穿った推察はさておき、文献をよくあたると、「弥生町の壺」は必ずしも向ヶ岡貝塚の中心から出土したものではないようである。坪井氏の報告には弥生町の壺がどこから出土したかの具体的な記載はない。しかし、その後に向ヶ岡貝塚をたびたび訪れた中山平次郎氏は、そこからの遺物の出土が少ないことを不審に思い、坪井本人に壺の出土のことを聞いたという記載がある。「…斯る廃滅に帰せんとしつゝある遺物の極めて少き局部から彼の壺形土器が出たのを奇異に感じたから坪井先生に伺ったところ、有坂君が崖ぎはのところから掘り出したといふて居られた…」(中山1930 p.103) というのがそれであるが、わざわざ「崖ぎは」と言ったのは、少なくともスケッチに見られる「貝の散じているところ」の中心ではなかったであろう。もう一つつけ加えれば、坪井氏は向ヶ岡貝塚を「貝塚の跟跡」と報告しているが、坪井氏が貝塚の本来の姿をどのような規模に考えていたかによって、坪井氏が考えていた向ヶ岡貝塚の全体像も変わってくる。日本考古学の嚆矢をつとめた大森貝塚はかなり大規模な貝塚であった⁶⁾。向ヶ岡貝塚の発見はその報告のわずか5年後の話である。坪井氏が大森貝塚のような規模を貝塚本来の姿と考えていたとすれば、氏の向ヶ岡貝塚は近来考えられてきたような「地点」にとどまらず、もっと広い範囲を指すのかも知れない⁷⁾。

発見者である有坂氏の記述が問題となるが、有坂氏が弥生町の壺と向ヶ岡貝塚について記述するのは、その発見から39年が経過した1923年のことであり、いずれの文章においても向ヶ岡貝塚について書かれた部分は、考古とは別の学の道を歩んだ氏の回顧録調のものである。中には、誇張や信憑性に欠ける部分も多いが、壺の発見についてもその日付に不明確な点があるという佐藤氏の指摘がある(佐藤前掲)。ただ、向ヶ岡に同行した坪井氏や白井光太郎氏が、壺の発見の現場に立ち会ったという記載や表現がないことは注意され、有坂氏は坪井氏等に共同の研究材料としてこの壺を供出するまでの間、氏個人で所有していたというから、壺の発見は有坂氏個人によって行われた可能性は強い。中山氏の質問に坪井氏が答えていることから、坪井氏が有坂氏から発見の場所を聞かされていることは確かであろうが、例えば大森貝塚の報告がそうであり、坪井氏の報告にもその傾向が窺われるように、考古学の黎明期の彼らの関心は個々の遺物にあり、それがどこから出たかということにはあまり頓着していなかったようである。

有坂氏の記載からは、氏がこの貝塚周辺を遺物を探して方々搜索した様子がかがわれ、「風景の極めて良い処で上野の森や不忍池を望んでゐる」とあるから、環濠が展開していると考えられる丘の上の部分にも足を運んでいることがわかる。弥生時代後期のほぼ完形の遺物が出土する蓋然性、

またそれが貝塚であるという蓋然性を考えれば、「崖ぎは」と坪井氏が聞き教えた壺の発見地点は、坪井氏の向ヶ岡貝塚とはやや離れるが、丘上に展開し、根津の谷に望んだ崖際を走ると考えられる環濠が、そのどこかで覆土を露出させていた地点であった可能性も考えられよう。

以上のことから、「弥生町の壺」の出土地点は「坪井氏の報告した向ヶ岡貝塚の（に近い）崖際」というのが正確に言えるところであろうが、現在考えられている向ヶ岡貝塚の地点よりは広い範囲のどこかと考えて良い。後述するように、東京大学調査の環濠一括出土土器と「弥生町の壺」との時期差をそう大きなものと考えないでよとすれば、「弥生町の壺」は少なくとも弥生町の環濠集落に住んだ人々あるいはその間もない後裔によって使用されたものであることは確かであろう。

3. 弥生町の弥生集落出土の弥生土器

「弥生町の壺」の出土地点は結局のところ正確にはわからない。しかし、「弥生町の壺」と弥生町の台地上に展開する環濠集落との関係のある程度推定できたことで、東京大学調査において出土した資料と「弥生町の壺」を関係付けながら話を進めることができよう。まずそれぞれの観察所見を述べておく。

1) 「弥生町の壺」の観察（第5図）

主に成形・整形と文様について記述する。

成形・整形 器形はいわゆる無花果形をしており、胴部のやや下の方でゆるい稜を成すがあまり目立たない。しかし、内面調整等をたどっていくとかなり特徴的な成形をしていることが分かる。まず、厚さ1cmほどの粘土円盤の縁にこれからはみ出さないように粘土を積み上げ始めている。底部が突出したように見えるのはこのためであろう。胴部下半の▲印の部分で内面に盛り上がりが見られ、この椀形の成形が終わった段階で一旦成形を止め、乾燥による粘土の安定を待ったあと再び粘土を積み上げたものと考えられる。この椀形の部分の内面は他の部分と比べてやや目の粗いハケ目調整を行っている。これより上部、△印付近までは、ナデと浅い細かな条線が残るハケ目調整を行いながら粘土をほぼ間断なく積み上げて仕上げている。△印より上の頸部の内面では、粘土を輪積みした跡と指で押さえた跡が見られ、工具による調整は行っていない。外面の調整は、縄文を施した部分以外の胴部は縄文の施文後、全面にわたってミガキ調整されているが、縄文帯の上の遺存している部分では縦位の浅い細かな条線の残るハケ目調整をしている。胴部のミガキは粗いもので、その合間に下の調整が観察されて良いはずであるが、一次的な調整は見出せない。これは、ミガキに先立って一次調整（おそらくハケ目と考えられる）を消し去っているためと考えられる（後述）。ミガキが施された部分は焼成の具合で、赤みがかかった部分もあるが、赤彩のはっきりした痕跡は見出すことができなかつた。胴部最大径は胴部中位ほどにあり30cm、底部径5.6cm、現存高22cm、図でわかるように全体にややひずんでいる。また、縄文帯の下、胴部最大径よりやや上の部分に粘土の接合の跡に沿って水平にひびが入っていたらしく、これを石膏で補修した跡がある。

前述した下方に張り出す底部の縁端部はつぶれて、はみ出したようになっているが、上述の一連

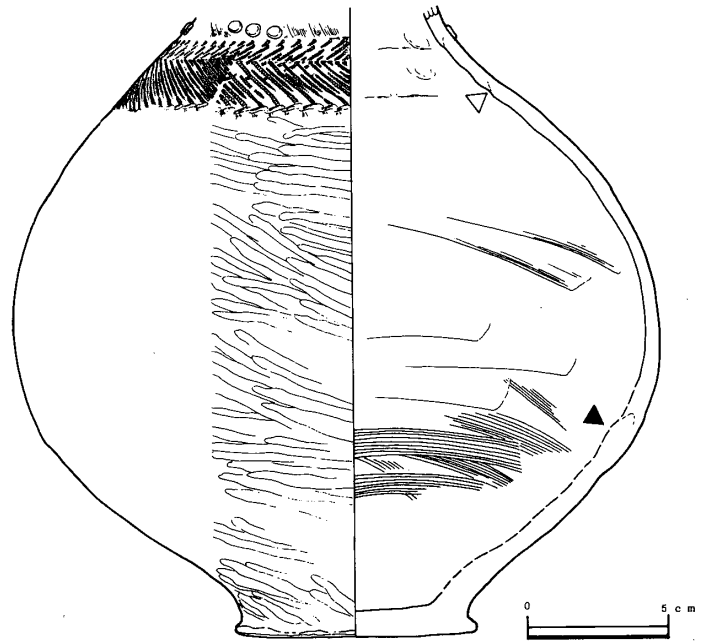
の製作行程の間、土器を傾けたり回転させたりした結果と考えられ、これを最終的に調整せずにそのまま残すのも一つの特徴といえる。

文様 肩部には単節 LR 縄文を閉端を上にして水平方向（上から見て反時計回り）に施文した後に、そのほぼ下半分に重複するようにやはり閉端を上にして単節 RL 縄文を施文して羽状縄文を作り出している（第6図写真参照）。この下段の縄文の下端には、原体の縄が解けないように縄の節の一本を解いて結んだ跡がS字状になって付いている。この下段の原体は、端末を原体の条ではなく節までほどいて結束する点で一般の「端末結節縄文」（鮫島1994）とは異なるが、ほぼそれに準ずる原体と考えてよいであろう。しかし、上段の LR 縄文の下端には結節の痕跡は見られず、上段と下段の施文を重複させる点など、「端末結節縄文帯」の基本的な文様構成は守られてはいない。

「縄文帯」の上位には円形の貼付文が三個単位で並んで施され、一部欠けているがこれが六単位ほぼ等間隔に頸部にめぐらされていたようである。

以上の観察所見の中で特徴的な点を以下の6点にまとめておこう。

- ①胴部下方で一旦成形を止めた形跡があり、緩い稜を成す。
- ②頸部内面に輪積みの痕跡を残し、工具による調整を行わない。
- ③底部が突出し、縁端部が再調整されない。
- ④体部ミガキの前に外面の一次調整を消している可能性がある。



第5図 弥生町の壺実測図



第6図 弥生町の壺の文様（写真）

⑤文様は「端末結節縄文」に類する原体が使われるが、「端末結節縄文帯」の基本的な文様構成はとらない。

⑥無刺突の小型の円形浮文を複数個単位で巡らす。縄文施文帯の中に貼らず、施文帯の上位に巡らす。

2) 『向ヶ岡貝塚』環濠一括出土土器

第7図に示した土器は、東京大学の調査で環濠内より一括出土した土器群⁹⁾である。「弥生町の壺」単体に対して、これらの土器群は一括して廃棄されたと考えられることから、使用・製作についてもある程度の同時性が考えられる点、甕形や広口壺形といった器種構成の一部を知り得る点で重要な資料となる。

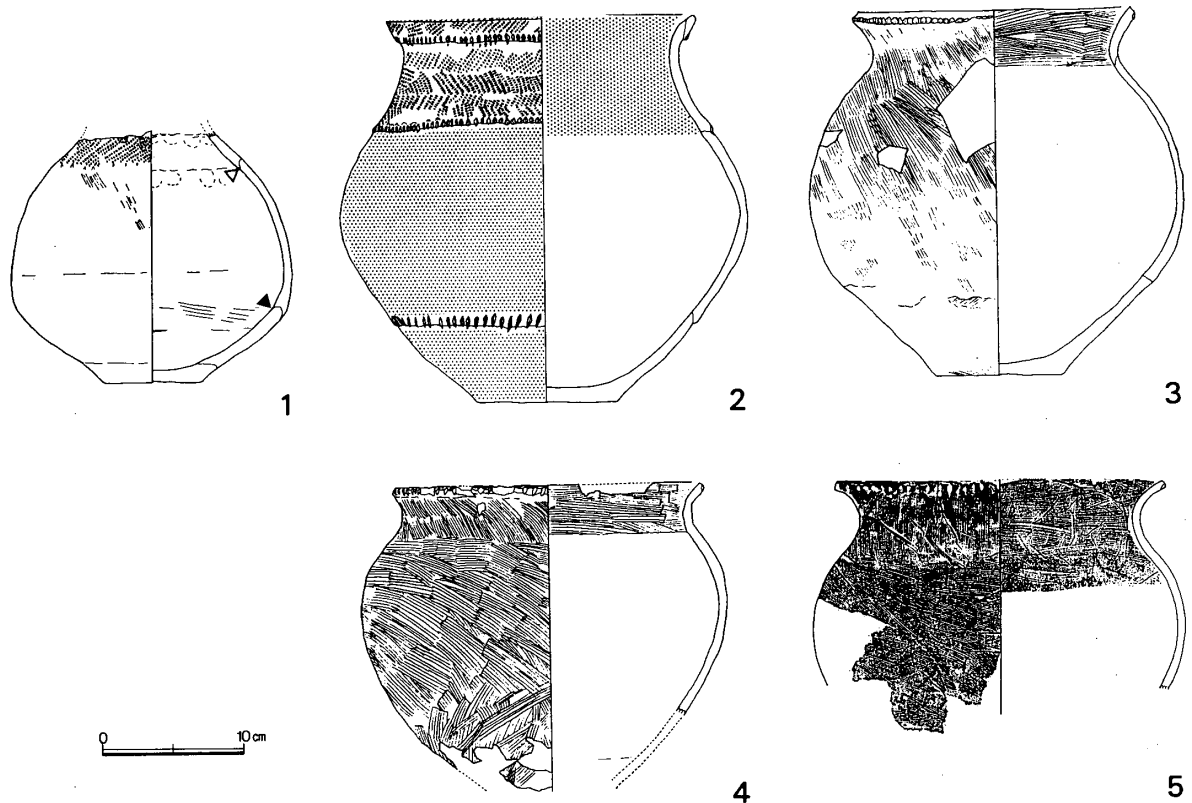
1は「弥生町の壺」に類似する要素が多く、重要な比較対象となる。

器形はやはり無果花形であるが、胴部下位で屈曲し「弥生町の壺」よりははっきりした稜を成し(▲印)、「弥生町の壺」に見られた①の特徴がより顕著に現れている。底部は突出せずやや上げ底になるが、ここに木葉痕が見られ、「弥生町の壺」の③の特徴とは大きく異なる。外面の調整は崩落がひどく確認しにくい部分もあるが、底部から胴部中位までは横位方向のミガキによって下の調整が消されており、緩い稜を成す部分の周辺にこれが顕著である。胴部上半は右下がり斜位のハケを施し、その上から右下がり縦方向にミガキを施す。ミガキ下に見られるハケ調整は比較的是っきりしており、④の特徴のようにこれを消した形跡は認めがたい。内面は下位がケズリ様のナデ、稜部分より上位が横位方向のナデで、肩部付近内面に一部斜位のハケ調整が残っている。頸部より上は欠失しているが、その直下、粘土紐三段分ほどに輪積み痕と指押さえを行った跡が残っており、②の特徴に一致する。

文様は器面の崩落によって確認しにくい。LR斜縄文の下端に結節圧痕が確認されR1縄の側面圧痕になっているが、結束はZになっているようである(Sの可能性もある)。つまり、「LR+RZ」(あるいは「LR+RS」)の「端末結節縄文」と考えられ、⑤の特徴において「弥生町の壺」よりも一般的な「端末結節縄文」を使用しているといえる。縄文帯の上部には二個対と考えられる不整円形の貼付文を持っており、「弥生町の壺」の⑥の特徴と類似するが、縄文帯の中に貼り付ける点で異なっている。

胎土は、砂粒及び軽石状の混和物を含むなど、武蔵野台地東部一般のものと考えて差し支えないと思われる。しかし、これらの技法上の特徴は東遠江から駿河湾西部の土器の一部に類似するものといえよう。

2は一般に広口壺とされる器形であるが、武蔵野台地東部よりも東京湾岸～房総半島、いわゆる「久ヶ原式」の中に一般的に見られるものである。胴部下位と上位に輪積み痕を残し、胴部輪積み部から複合口縁に至るまで縄文による装飾を行う。調整は内面に浅い条痕の残る調整が見られるが、いわゆる針葉樹材を用いたハケとは異なっており、他の部分でも一切ハケ調整は用いない点で、このほかの出土遺物とは異なる。縄文の施文部位と底部以外は内外面ともヘラミガキされる。



第7図 向ヶ岡貝塚（東京大学調査地点）B溝一括出土土器（東大考古学研究室編1979より転載）

3は甕形土器であると考えられるが他の甕形土器が脚台を有すると考えられるのに対して、この土器は平底である。胴部下位で一度成形を止めた形跡があり、この擬口唇上にハケ目が残ることが報告書でも指摘されている。図示されていないが外面の胴部中位～下位と内面下位は右上がり斜位のミガキが施されており、煮炊きで使用されたかどうかは疑問が残る。口唇部は面取りされるが、注意されるのは口唇下端に布目の押圧文⁹⁾を施す点である。布目の押圧文は主として輪積み装飾を持つ甕の輪積部や口縁、またそれらに伴う壺形土器などの口縁下端や輪積部などに見られるものであり、ハケ調整の土器に対しては異質なものと考えられる。

4, 5は台付甕と考えられるが胴下位を欠失している。ともにハケ調整で仕上げられ、外面の調整の手順は類似しているが、口縁の屈曲の具合、特に4の内面のハケが口縁部と胴部とを明瞭に分けている点で違いが認められる。口唇部はハケで面取りされ、両者とも下端にハケ原体によるキザミを施す。

3) 弥生町出土土器の特徴

前節までに見た「弥生町の壺」および環濠中から出土した土器群には、必ずしもこの集落あるいはこの地域に限られないいくつかの技法的な特徴が見られた。ここでは弥生時代後期の武蔵野台地東部およびそれと関係する地域の土器様相の中で、これらの特徴がどのように位置づけられるか、主に「弥生町の壺」に見られた①～⑥の特徴を中心に、技術的な視点から検討してみよう。

a. 成形

a-1 胴部下半の稜 (①の特徴)

ここで扱う弥生土器が幅1~2 cmほどの粘土紐を輪状に積み上げていくことによって成形されていることは、土器を観察することによって明らかであるが、壺のような複雑な器形は数段（一般に3~5段ぐらいか）を積み上げた後に調整し、乾燥による安定を待って次の数段を積み上げるという行程を繰り返すことによってはじめて成形が可能であり、「結果としての粘土帯」（佐原1986）と言われるような成形の単位を持っている。この帯状の成形の単位を以下では「成形帯」と呼ぶ¹⁰⁾。ここで取り上げた壺形土器の胴部下半に見られる稜は、この成形の「成形帯」と「成形帯」の境目であり、前述したように下部の成形単位の乾燥による安定を待った結果であろう。

一般に壺形のような器形を作る際に椀形のように粘土を積み上げながら径を広げて行く行程よりも、壺の胴上半のように径を狭めていく行程の方が作業を迅速に行うことが出来ると考えられる¹¹⁾。従って、土器の下部の椀あるいは鉢状の部分を作って、乾燥等によって十分安定するのを待った後、それを土台として一気に土器の上部を作り上げる方法は、実際に作業をする時間を短縮する上では大変合理的な方法である。従って、弥生後期の菊川式や箱清水式のように、壺形土器で下位に稜を持つ算盤玉状の器形を持つものは、各時代の粘土紐作り成形の土器一般にもしばしば見られるであろう。

一方、容器としての内容量の確保や使用時の融通性、さらに見た目の嗜好等から、壺形の器形では球形や緩やかな流線型を指向するものも多い。この場合は、底部から積み上げた下位の粘土の安定を待ちながら順次「成形帯」を重ねていくことによって、より均整のとれた球胴が得られる。例えば、後期の東京湾岸・房総半島地域の比較的安定した土器様相を久ヶ原式¹²⁾（以下断りを入れず使用する）と呼ぶならば、そこでの土器の成形法は、底部から頸部まで成形する間に4つほどの「成形帯」を作っているが、特定の部位で稜を成したりせず土器の断面形はなだらかな曲線を描くものが多い。

武蔵野台地東部では、この両者が混在している様子がうかがえるが、南関東の中で比較すると、胴下位に稜を持つものがかなり多い点で注目される。

a-2 頸内面未調整 (②の特徴)

胴部と頸部の境付近に輪積み痕や指押さえ痕を残す壺形土器は、弥生土器にもしばしば認められるが、通常土器が完成した時点では外から見えない部分にあたるため、製作者によって必ずしも故意に残された特徴とはいえないであろう。概して、細頸のものや頸部の屈曲のきついものに多いが、粘土の積み上げ後に工具による調整が器形の制約によって困難なためと思われる。これをここでは便宜的に「頸部内面未調整」と呼ぶことにする¹³⁾。

南関東の弥生時代後半では、宮ノ台式の細頸のものに見られることがあるが、後期の東京湾岸や房総半島（いわゆる久ヶ原式）では、頸部が手の入る大きさを緩やかに湾曲するためか、胴~頸部内面も工具による器面調整が行われており、輪積みや指押さえが残るものは例外的である。南関東

では、相模湾岸地域によく見られる伊場式（山中式）系など東海西部系の櫛描文装飾が施されることの多い頸部の屈曲する壺に頸内面未調整の例が多いが、それを除くと相模湾岸および武蔵野台地東部周辺を中心に縄文やハケ刺突の装飾を持つ壺形土器に時折見られる。

これを西へたどっていくと、菊川式にはかなり多くの例が見られ、南関東の例もこの付近の影響を受けていることが考えられる。

a-3 底端部未調整

底部が突出し、その端部が調整されないまま残される例は武蔵野台地東部ではあまり類例を見ないものである。武蔵野台地東部以外に目を転じると、いわゆる登呂・飯田式の分布する駿河湾東部に類例が多い。しかし、この地域のものは土器の大きさに対する底部径の比率が「弥生町の壺」の場合に比べてかなり大きい。従って、「弥生町の壺」の③の特徴は技術的には駿河湾東部付近の影響がうかがえるが、「弥生町の壺」独自の要素がかなり強いと言えるであろう。

b. 調整

南関東周辺の弥生後期土器一般に用いられる器面調整は、主にハケ調整とナデ調整であり、特に甕形土器の器面調整における両者の分布の偏りの問題はこの地域の土器の地域色の問題を大きくクローズアップした（神之木台遺跡調査グループ1977、滝沢1979、比田井1981、大村・菊池1984など）。しかし、土器の製作技術論から考えれば、調整法はすべての器種に共通する問題であり、いわゆる「ナデ甕」と「ハケ甕」の問題は、両者がそれぞれ含まれる器種構成全体の調整法（製作技法）の問題として捉え直す必要があるだろう。

いわゆる「久ヶ原式」では、ナデ調整の甕とセットになる壺、広口壺、椀、高坏などの器種でも器面調整にはナデ調整が用いられ、ハケ調整が用いられることはない。そのほかハケ工具を用いた刺突などの文様も認められない。

一方、ハケ調整の甕であっても内面調整などにはしばしばナデ調整が用いられており、調整には専らハケを使用するとはいえない。ハケ調整の甕とセットになる壺などの器種でも、製作工程の一部でやはりハケ調整が使用されることが確認される。また、いわゆるハケ目を含めて、口縁のキザミや擬縄文・横線文などの押圧、ハケ工具を押し引きしたと考えられる沈線など、ハケ目あるいはハケ工具を文様あるいは施文具に置き換える例は多く、これらも当然ハケ調整を使用する土器群の中で見られる。こうしてみると、甕形土器の特徴の差異として確認された地域色の差は、その地域の土器製作者によって使用される調整工具のバラエティーの差として認識されると言えよう。

調整から見て、弥生町の土器群の中で明らかに異質であるのは2の広口壺である。他の土器が器面調整の中で、どこかにハケ調整を使用しているのに対し、この土器は一切ハケ調整を使用していない。このことはこの土器がいわゆるナデ調整の甕を持つ器種構成の中に含まれることの傍証となるだろう。

南関東から東海地方東部のハケ調整を用いる土器群では、壺形土器についても甕形土器と同様に、主に外面をハケ調整によって仕上げているものがあるが、多くはその後のミガキや文様などによっ

て、これらのハケ目が観察しにくくなっている場合が多い。さらには、施文やミガキを行う事前に予めハケ目を消し去っていると考えられるものがあり注意される。ハケ目を消すこと自体にも装飾的な要素（美観）を高める意図があると考えられるが、文様施文やミガキだけでハケ目を消し去ることが難しいことに加え、ミガキや施文の効果を高めるための下準備としてこのような手法が用いられるのではなかろうか。弥生町の壺の④の特徴もこの類例として挙げられるが、他に器面が薄く剥落してその下にハケ目が観察される例などが見られ、ナデ消す、布など水を含んだもので拭き消す、あるいは泥漿（スリップ）様のものを塗布するなどしたことが考えられる。その技術的な起源や分布の中心が問題になるが、いずれにせよ、ハケ調整を行う土器に見られる技法として注目される。

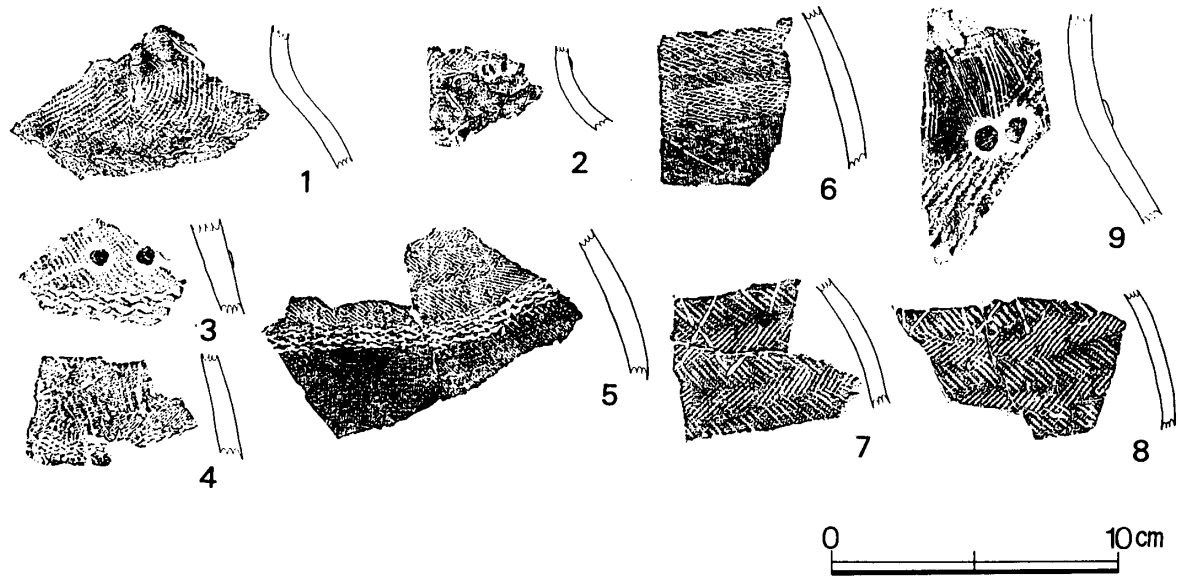
c. 文様

南関東弥生後期において、甕形土器に地域的な差が明瞭になってきているのに対して、壺形土器についても同様な系統性が想定される。文様は後期の壺形土器にはかなり普遍的に付加されるものであり、その豊富な属性から系統や地域色を考える上で重要な素材となるが、文様構成全体から各土器を類型化し、分類していくと極めて多様で煩雑になる。筆者は南関東の文様の中で縄文原体の製作法の違いから、「端末結節縄文」と「縄文と「自縄結節文」の組み合わせ」とを分別し、それぞれを用いる文様の系統を「端末結節縄文帯」と「区画縄文帯」とに区別した（鮫島1994）。また、「区画縄文帯」が南関東地域内の宮ノ台式からたどれる施文法を維持してきたのに対し、「端末結節縄文帯」は東海地方の東遠江周辺地域で発達してきたものと考えた。従来、南関東の壺形土器に時折見られるハケ刺突（擬縄）文、櫛描文などは特異なものとして注目され、東海地方東部に起源を持つ外来的な要素として分離されてきたが、かなり普遍的に見られる縄文施文の中でも「端末結節縄文帯」については本来外来的な要素であると考えられる必要がある。

弥生町より出土した弥生後期の壺形土器の胴部文様は、縄文（網目状撚糸文を含む）を用いるもので占められるが、前述した各系統のものが見られる。「端末結節縄文」を用いるものは、環濠一括出土土器の中の壺、破片資料（第8図1, 2）、に認められる他、「弥生町の壺」の文様もこれに類するものであることは先に述べた。しかし、弥生町の壺の場合は、原体の結束法も一般的なものではなく、文様構成も縄文を重複させて施文するなど「端末結節縄文帯」の施文原則からはかなり崩れたものと考えられる。また、羽状縄文を「自縄結節文」で区画するもの（同図3～5）、網目状撚糸文を持つもの（同図6）、羽状縄文のみで区画を持たないもの（同図9、他に小型の壺形土器の出土がある）など多様な文様が認められ、異系統の文様が混在している様子がうかがえる。

また、円形の貼付文も多数の土器に見られるが、径0.5～1.0cmほどの大きさで2, 3個を一組に縄文帯の中あるいは直上に貼り付けるのが通例と言えよう。円形（または棒状）の貼付文も東海地方東部から南関東にかけて見られるものであるが、円形小型貼付文を複数個一組で縄文帯の中に貼り付けるものは駿河湾岸に多いようである。いわゆる「久ヶ原式」ではこれよりやや大ぶり（径1～2cmほど）で、竹管による刺突を多数施したものが一般に見られ、違いを指摘することができよ

弥生町の壺と環濠集落



第8図 向ヶ岡貝塚（東京大学調査地点）出土壺形土器の文様（東大考古学研究室編1979より転載）

う。

4. 土器の生産の形から見た「弥生町の壺」－環濠集落の土器の特徴

1) 土器の「規格性」

弥生土器の生産はせいぜい大きな集落単位に行われたと考えられている（都出1989, pp.287-290）。しかし我々が型式やあるいは様式として捉える土器のまともりはそれを越えて広がっている。つまり、そうした目で捉えた「同じ土器」は複数の集落や一定の地域といった範囲で作られているわけである。こうした複数の製作者の間で「同じ土器」が作られるためには、まず、彼（女）等の間に土器作りの素材や道具に関する知識やそれらの調整法や扱いなどの技術が共通して備わっていることが考えられる。しかし、さらに文様や細部の意匠といった製作者の表現の部分までが近似するのは、製作者の意識の部分にまで一定の制約が働いているものと考えられる。

小林行雄氏は様式の変化について、「描かれざる設計図」という言葉を用いて以下に引用する説明を加えた。

「…物を生むのは人である。物を作らうとする人は常に作るべき物の完成より前に、自分自身のうちに作られるべき物の形を抱いてある。この描かれざる設計図なくしては、物の作られることは無いのである。さうしてこの設計は、個人の解放の行はれた近代に於てすらさうである様に、古代にあつては尚のこと作者に物を作ることを、見ることを、考へることを教へた集団の作品なのである。作者は教へられた方法によつて設計図を考へ、それにならつて物を作る。

人は物を作る。さうして作られた物を既に持つ限り、新しい製作に際しても今作らうとするものが、既に作られたこの様な物であることを、或はそれらとは何か異つた物に見たいと、思ふことなくして作るべき物の形を眼に浮かべることが出来ない。描かれざる設計図とは作られた物の作

る人に與へる協力である。今作られた物は現在が過去から受け継いだ設計図の実施であり完成である。同時に現在が未来へ贈る設計図への資材であり制約である。作られた物はかくして絶えず設計図の中から昇華し、またその中に溶解する。この常に書き変えられつゝある設計図こそ様式そのものであり、過去から未来へ流れる様式を、現在の一点に、具象化の重心に支へる物こそ個々の遺物にはかならない。様式は物として実在しない、それは物を通して現れるものである。様式をその実在のうちに表現する物は動かないが、物を貫く様式は動き生長する。かくてわれわれは動かない遺物群によって様式の動きを知ることが出来るのである。…」(小林1939 pp.10~12)

小林氏の表現は、「描かれざる設計図」という比喩も含めて、かなり抽象的であるが、手工業品である考古遺物の性格と、その生産の仕組みに鋭く迫ったものと言えよう。ここでは、小林氏が指摘した土器の生産の背後にある制約や人々の意識を考慮しつつ、ある土器の生産のまとまりが一定の地域に広がり、安定した様相を保つことについて考えてみよう。

無論、人がその手で土器(遺物)を作る場合、全く同じものを作ることは不可能であるが、同じ様な技術で同じように作られた土器(遺物)を大村直氏の言葉を借りて「半規格品」(大村1993)と呼び、その「規格性」を問題としよう。「半規格品」が作られるためには、まず、一個の手本があって、それと同じようにもう一個の土器(遺物)が作られなければならない。一人の人間がそれを行うとすると、既に作ったものに関する知識や技術は備わっているわけであるから、同じ様なものを作ることは比較的容易である。しかし、その製作に関して何の制約もない場合には、個人の持つ創意・工夫や手抜きなどによって必ず何か違ったものにしようという意志が生じるであろう。また、別の個人が製作する場合、その製作に関する知識や技術がどの程度伝達されているかによって結果はかなり異なると考えられる。手本の製作者からよほどの教示や手ほどきを受ければ、きわめて同じ様なものを作ることができるであろうが、手本の製作者の意図が伝わらない(間違う)可能性は常にあるし、必ず個人の癖というものが出来るであろう。一方、手本に関する知識や技術を持たず、また得ることができない場合は、個人が別に持つ知識や技術を用いた模倣に終わろう。このように人がものを再生産する場合に、常にその規格性が失われる方向性がある。

集落を単位として土器が作られる場合、土器や工具の素材は集落として入手されるものであろうし、製作は個人や一、二人が独立して行うとしても、集落の中で生活を共にし、土器作りが共同の場で行われるとすれば、技術の伝達はかなり正確に行われるであろう。また、生産は集落の必要に応じて行われるから、製作者は集落の成員が必要と認めるものを製作することになり、ここに制約が生じる。例えば、壺形土器が製作される場合に、その手本は既に本人やその他の製作者が製作したものであり、また、集落の成員の中で壺として意識されているものになる。製作者がこれと違ったものを製作しようという意志は、何の制約もなく別の一個の土器を作ろうとする場合と比べれば、大きく抑制されるであろうし、それが多数の意志の中で認められる可能性は少なくなる。仮に製作者が何らかの形で異なったものを作ったとしても、次のもう一個の土器を作る際の手本は、異なったように作られた土器ではなく、やはり、これまで製作された「規格性」を持つ壺であり、集落の

成員の意識にある壺なのである。一方で、何らかの新たな創意が生産単位の中で認められ、規格性を持ち始めるとそれは急速に新たな制約として成立するという側面ももっている。このようにして集落単位に生産される土器での「規格性」は生じ、維持され、変化していくものと考えられる。

土器の「規格性」が地域色として現れる場合は、さらに生産単位の集落を越えてこうした制約が広がっていることが考えられる。ここでは、先に考えた集落内でのモデルをある地域内での集落間の関係として捉え直すことができよう。まず、土器作りの素材や道具に関する一定の知識や技術がそれぞれの生産単位に共通して備わっていることが必要であるが、さらに共通した制約が生ずるためには、物や技術（人）の交流が頻繁に行われていることが前提となる。そのような中では、集落内の製作者間の関係と同じように、ある生産の単位が集落間に共通する「規格性」とは違った物を製作し始めた場合、この生産単位と交流する「規格性」を持つ土器や人々の意識によって制約を受け、違った物は排除され、再び「規格性」を持つ「半規格品」が生産されていくと考えられる。また、「規格性」からはずれた新たな要素が集落間で認められ、新たな「規格性」を生じれば、それは共通した制約を持つ範囲で急速に広がることとなろう。しかし、その地域内での古い「規格性」が持つ制約が強ければ強いほど、新たな「規格性」は古い「規格性」の制約を受け、その間の変異は小さくなり、結果として漸移的な変化にとどまるのではなかろうか。

土器の地域色は、このように、それが一定の「規格性」を持っている場合に保守的な性格を有することになる。この保守的な性格は一方で排他的な側面を持つ。例えば、南関東地方弥生後期において壺形土器の「端末結節縄文」の分布と量には著しい偏りがある（鮫島前掲）。房総半島地域はこの「端末結節縄文」がほとんど分布しない地域であるが、菊川式土器あるいはそれを模倣した土器が散見されることから見て、その情報は伝わっているはずである¹⁴⁾。しかし、「端末結節縄文」は全くと言っていいほど見られないし、菊川式系の土器を出土した遺跡でも、他の一般の土器に菊川式の要素が定着するような現象は見られない。これは、土器の「規格性」とそれを維持する制約が、内在的に生じた異質なものを排除するのと同じように、外来的な異質な要素に対しても排除する性格を持っているためだと考えられる。

2) 弥生町出土土器から見た地域色の性格

「弥生町の壺」に用いられた製作技法には、前章で見たように、東海地方東部に共通する要素が多く認められる。しかし、底部や縄文原体の製作法に見るように既にそれらの技法にも「くずれ」が生じており、それらの技法を用いて作り上げられた結果としてのこの壺の類例を求めようとするに極めて苦慮する結果となった。武蔵野台地東部の中で弥生町の壺に見られる特徴のいくつかを合わせ持つ土器は抽出できるが、それら各土器の一個の土器として完結した姿と弥生町の壺の間には大きな変異が存在する。つまり、弥生町の壺を東海地方の技法を持つ土器からの「変容」した姿と考えるならば、この地域の土器の「変容」には一定の方向性は認められないと言える。

一方、環濠から一括して出土した土器群（第7図）については、2の広口壺形土器を除いて、胴部下半で一旦粘土の積み上げを停止する成形法や、調整や施文へのハケ工具使用などに、一定の共

通した技法を読みとることができる。1の壺形土器は菊川式の一部の壺形土器の特徴を持っているが、頸部以上を欠くためそれがどの程度忠実に行われているかは、判断材料を欠く。また、台付甕形土器は、口唇部を面取りし下方からキザミを加える点を菊川式の影響と評価することもできようが、東遠江・駿河湾沿岸から相模を経て武蔵野台地東部にまで分布するこの種の甕形土器の変異を前提とすれば、どのような特徴をもって在地・外来とするかは容易に判断しうるものではない。このような不確定要素が多いが、3の甕形土器の口唇部布目押圧がハケ調整などこの土器に使われている他の技法にそぐわない点や、環濠から出土した他の壺形土器の文様の多様性（多系統性）などをあげれば、前述した一定の技法とは異質な要素を既に取り入れているものと考えることができよう。また、弥生町の遺物の中では明らかに異系統である2の広口壺形土器の存在も、これら異質な要素の受け入れがスムーズに行われたことの傍証になるであろう。

近年の環濠を伴う集落の調査例からは 東京都下戸塚遺跡、四葉地区遺跡や神奈川県綾瀬市神崎遺跡など集落の成立の初期に環濠の掘削が行われ、それが人的移動を契機とすると考えられる例が報告されている。弥生町の環濠に埋没する遺物の全体像は推定しがたいが、出土した遺物に見られる菊川式土器の要素を評価すれば、東京大学調査で出土した土器群あるいはその前段階に何らかの人的移動を想定することも可能であろう。

これに対して弥生町の壺形土器を変容が進んだ形と見るならば、環濠の土器群に対して時間的な後出性が考えられる。しかし、その変容の度合いを必ずしも時間的距離に置き換えることができるかどうかは注意されるべきところである。松本完氏は板橋区四葉地区遺跡の環濠出土の外来系土器を分析した際、甕形土器について「同一の堆積単位として括られた同じ層準から、変容の少ないもの、変容の著しいものの両者が見られること」を示し「東海系土器群の受容に続いて、極めて急速な変容過程が始まったこと」を想定している（松本1993b）。弥生町の環濠出土の土器の中にも、既に異質な要素を取り込んだ形での変容が見られた。また、「弥生町の壺」に一般的に新しい要素と考えてよいと思われる頸部の屈曲化や胴部の球胴化が顕著でないことから考えても、環濠出土の土器と「弥生町の壺」の間に大きな時期差を考える必要はないようである。

さて、弥生町の環濠集落の土器、あるいはいくつかの例を引いた中に見られるように、環濠の掘削あるいはその後土器が急速に変容し、その変容の過程には一定の方向性が見られず、各土器間の変異は大きいといった傾向を指摘しうるとすれば、そのような土器様相には、前節で措定した集落間の制約によって「規格性」を維持し漸移的に変化していく土器様相のモデルとは極めて対照的な現象を読みとることができよう。つまりは、土器が「規格性」に乏しいということであり、それを支える一定地域に共通する制約を欠いていると考えられる。また、土器の生産単位と考えられる集落内でも、「規格性」に乏しい土器が生産されるということは、集落内ですら人々の結びつきが不安定であったことをも推定させよう。

土器の様相から推定される、こうした集団やその構成員間の関係は、ここで扱った集落が環濠集落であること、あるいはそれを母胎として展開した集落であることと無関係ではなからう。環濠

集落に関しては、既に指摘されている人的移動も含めて、様々な特殊な要素が絡んでいると考えられるが、その景観から推察される機能や意味だけにとどまらない性格を、そこから出土する土器からは読み取ることができるようである。さらに多くの事例を分析した上での考察が必要とされるが、今後の課題としたい。

5. 結 語

量的に不十分な資料から、問題を広げすぎた感があるが、それだけに残された問題は多い。土器の「規格性」に関して、相対照的な二つの様相が推定されたわけであるが、それぞれについて具体的な分析と考察を行っていくことを今後の課題としたい。

「最初の弥生土器」としてその使命を終えたかのような「弥生町の壺」であるが、これまでに述べてきた意味で、この地域の弥生後期の土器の性格を端的に示す資料であると考えている。本稿が「弥生町の壺」が再び考古資料として活用される一助となれば幸いに思う。

本稿は、一昨年東京大学総合資料館において「東京大学コレクションⅠ 東アジアの形態世界」と題して行われた展示の図録に掲載した、弥生町の壺形土器についての解説をもとにしているが、解説とは主旨の異なるものとして書き直した。このような機会を与えてくださった今村啓爾先生にはあらためて感謝の意を申し上げます。また、原稿の遅滞を御寛恕いただいた安斎正人氏はじめ、多くの方々のご指導とご厚意をいただきましたことに、重ねて感謝の意を申し上げます。

註

- 1) 1994年10月に東京大学総合研究資料館において、「東アジアの形態世界」と題する展示が行われ、同時に刊行された図録で「弥生町の壺」の解説を担当したが、その執筆の際東京大学総合研究資料館において同土器を実見し、実測図をとらせていただいた。同館の高橋女史には本稿に掲載した写真(第1図)のネガを手配していただいたほか、色々と便宜を図っていただいた。あらためて感謝の意を申し上げる。
- 2) 現在東京都遺跡地図(東京都教育委員会1988)では弥生町遺跡群として囲まれている範囲にあたる。
- 3) この部分に明治の初期に東京共同射的会社の射的場がつくられ、大きく抉られ地形が変わっているが、古図を見ても本来谷であり、現在の東京大学本郷地区にあたる加賀藩と弥生～浅野地区にあたる水戸藩の武家屋敷の境界を成していた。
- 4) 1993年末から1994年初めにかけて、東京大学埋蔵文化財調査室により調査が行われた。
- 5) 1988年2月に東京大学遺跡調査室により行われた。
- 6) モースの報告によると「…長さは、崖沿いに約八十九メートルあり、厚さは最大四メートルである。線路の裏手九五メートルのところ、かなりの厚さの貝塚がもう一つあるが、第一の貝塚とつながるかどうか…」(近藤・佐原訳1977)と言う大規模な貝塚であったようである。
- 7) 坪井氏の報文の冒頭では遺跡の位置について「此古跡のある地は格別六ヶ敷所では無く」と断りながら「僅に一筋の往来を隔てたる大学の北隣、即ち舊向ヶ岡射的場の西の原、根津に臨んだ崖際でござります」としか説明していない。
- 8) 東京大学調査の他の遺物とともに、東京大学総合研究資料館において実見した。

- 9) 報告書には「縄目痕」とあるが、粘土で型をとってみると布目であることが観察される。南関東の弥生後期の押圧文で、筆者が実見した例では布目は多く確認したが、縄目はないように思われる。おそらく縄目の圧痕と報告されているものの中には、布目の圧痕であるものが多く含まれるのではないか。
- 10) 土器の製作途中に行われる器面調整は、この「成形帯」ごとに行われているものが多いので、器面調整を観察していくことによってそのおおよその部位や幅を知ることができる。また、「成形帯」と「成形帯」の継ぎ目は粘土の乾燥の度合いの違いなどから接合が弱く、この補強のために行った調整が残っている場合や直接この部分に輪積み痕跡が残っている場合もある。また、土器が割れるときはこの「成形帯」の継ぎ目部分から割れることが多く、土器がどういう割れ方をしているかを観察することによっても、この「成形帯」を検証することができる。
- 11) 粘土の輪を積み上げる際、その径を大きくしていくと下位よりも上位の重量が増し下位に歪みを生じやすくなる。また、粘土の自重は鉛直下方向にかかるが、横方向には粘土の輪が広がる方向に働き、亀裂などを生じやすくなると考えられる。逆に径を小さくしていく場合には、粘土の自重は軽くなっていき、力は粘土紐の輪を締める方向にかかるから成形は比較的容易であると考えられる。
- 12) 「久ヶ原式」の型式名称の使用に関しては異論が多いと思われる。大村・菊池両氏が「久ヶ原式を主体とする地域」として挙げた「南武蔵多摩丘陵南部、相模三浦半島域、上総・安房地方から下総東南部地域の東京湾をとりまく地域」の後期弥生土器は、ナデ調整・輪積み・「区画縄文帯」の壺形土器・広口壺や椀（高坏）等をあわせた器種組成など、一定の技法を用いた比較的安定した土器様相を持っているといえよう。これを久ヶ原式と呼ぶ両氏の見解にここでは従う。ただし、この中には従来「弥生町式」と呼ばれていたものを含んでいる。例えば、上記の地域の中で上総小櫃川流域を中心とした編年案が諸墨知義氏によって示されており（諸墨1993）、この編年観に筆者もおおむね同意するが、特に後半期の壺形土器は、重山形文・重四角文などの特殊な装飾の壺形土器を除けば、従来弥生町式と呼ばれていたものである。
- 13) 製作者が胴部の成形から頸部の成形に移る直前の粘土紐2～4段ほどが、最終的にハケ目等の調整をされずに残されるものを指す。厳密には胴部の最上段の「結果としての粘土帯」一段分に相当する部位である。
- 14) 筆者はこの地域に「端末結節縄文」の情報が伝わっている実例として、山田橋表通遺跡46号遺構例をあげた（鮫島1994）が、その後大村直氏のご厚意で本土器を再実見した際、筆者が擬縄文とした文様上部の文様は無節の縄文を見誤ったものであることがわかった。不注意をお詫びし、この土器が菊川式の影響を受けている可能性は少ないと訂正しておく。

《引用・参考文献》

- 愛知考古学談話会編 1988『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会
- 有坂鉛蔵 1923「日本考古学懐旧談」『人類学雑誌』38-5
- 有坂鉛蔵 1924「過去半世紀の土中」『中央史壇』9-4
- 有坂鉛蔵 1929「史前学雑誌の発行を喜ぶにつけて過去五十年の思ひ出」『史前学雑誌』1-1
- 有坂鉛蔵 1935「弥生式土器発見の頃の思出」『ドルメン』4-6
- 有坂鉛蔵 1939「人類学会の基因」『人類学雑誌』54-1
- 石坂俊郎 1994「花ノ木遺跡出土の弥生土器について」『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第134集
- 今村啓爾 1988「発掘物語 弥生町遺跡」『図説検証原像日本4』旺文社
- 宇野信四郎 1967「東京都北区飛鳥山遺跡の調査報告」『古代』第49・50合併号

弥生町の壺と環濠集落

- 江坂輝彌 1938「弥生町貝塚を再発見して」『考古学論叢』8
- 太田博太郎 1965a「弥生式土器の発見地」『日本歴史』203
- 太田博太郎 1965b「弥生町貝塚はどこか」『古代文化』15-2
- 太田博太郎 1981「再び弥生式土器の発見地について」『日本歴史』393
- 大村 直 1983「弥生土器・土師器編年の細別とその有効性」『史館』第十四号 史館同人
- 大村 直 1993「ムラの廃絶・断続・継続」『市原市文化財センター研究紀要』II
- 大村 直・菊池健一 1984「久ヶ原式と弥生町式—南関東地方における弥生時代後期の諸様相（予報）—」
『史館』第十六号 史館同人
- 岡本 勇・小滝 勉ほか 1991『神崎遺跡』綾瀬市埋蔵文化財調査報告書2
- 金子浩昌 1991「山王三丁目遺跡溝状遺構出土の貝類」『山王三丁目遺跡』熊野神社遺跡群調査会
神之木台遺跡調査グループ 1977「神之木台遺跡における弥生時代の遺構と遺物」『調査研究収録』第3冊
港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 河合英夫ほか 1985『殿屋敷遺跡群C地区発掘調査報告書』
- 車崎正彦 1991a「東日本の環濠集落」『邪馬台国時代の東日本』国立歴史民俗博物館編
- 車崎正彦 1991b「東京都・下戸塚遺跡」『邪馬台国時代の東日本』国立歴史民俗博物館編
- 黒済和彦 1985『中野区平和の森公園北遺跡発掘調査報告書』中野区・中野刑務所遺跡調査会
- 小出輝雄 1983「弥生町式の再検討」『人間・遺跡・遺物』発掘者談話会
- 甲野 勇 1930「東京府下池上町久ヶ原弥生式堅穴に就いて」『史前学雑誌』第二巻第一号
- 小林謙一ほか 1988『新井三丁目遺跡』新井三丁目遺跡調査会
- 小林三郎ほか 1988『御殿前遺跡』北区埋蔵文化財調査報告第4集
- 小林達雄・山村貴輝ほか 1988『四葉地区遺跡—昭和62年度—』
- 小林行雄 1939「弥生式土器聚成図録」『東京考古学会学報』第一冊
- 小林行雄 1971「弥生式土器論」『日本文化の起源』第一巻 考古学
- 近藤義郎・佐原真訳/E・S・モールズ著 1977「大森貝塚」『考古学研究』第24巻第3・4号
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第134集
- 斎藤 忠 1938「弥生式土器の発見」『日本の発掘』東大新書45
- 佐々木達夫他 1978『動坂遺跡』動坂遺跡調査会
- 佐々木藤雄 1991『山王三丁目遺跡』熊野神社遺跡群調査会
- 笹森紀己子 1984「久ヶ原式から弥生町式へ」—壺形土器の文様を中心に—『土曜考古』第9号 土曜考古学研究会
- 佐藤達夫 1975「向ヶ岡貝塚はどこか」『歴史と人物』46
- 佐原 真 1986「3 弥生土器の制作技術 1. 粘土から焼き上げまで」『弥生文化の研究3 弥生土器I』
- 鮫島和大 1994「南関東弥生後期における縄文施文の二つの系統」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第12号
- 柴田 睦 1988「南関東出土の菊川式系土器」『法政史論』第16号
- 菅原道・中津由紀子 1989『千駄木遺跡』国際基督教大学考古学研究センター
- 杉原荘介 1940「武蔵弥生町出土の弥生式土器について」『考古学』第11巻第7号
- 滝口宏・玉口時雄 1955『道灌山遺跡』東京都荒川区役所
- 滝沢 浩 1979「赤塚氷川神社北方遺跡」『板橋区文化財シリーズ第29集』
- 田中清美・鈴木英啓 1981『唐崎台』唐崎台遺跡発掘調査団・市原市教育委員会
- 都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 坪井正五郎 1889「帝国大学の隣地に貝塚の跟跡有り」『東洋学芸雑誌』6-91

鮫島 和 大

- 東海埋蔵文化財研究会 1991『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ分冊
東京大学考古学研究室編 1979『向ヶ岡貝塚－東京大学構内弥生二丁目遺跡の発掘調査報告－』
東京都教育委員会 1988『東京都遺跡地図』
中島郁夫 1988「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」『転機』2号
中島郁夫 1993「東海地方東部における後期弥生土器の「移動」・「模倣」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器 第8回埋蔵文化財研究会 論考編』
中村恵次・栗本佳弘 1974『市原市菊間遺跡』房総資料刊行会
中谷治宇二郎 1923「東大人類学倉庫跡より発見されし二個の石器について」『人類学雑誌』39-7・8・9
中山平次郎 1930「近畿縄紋土器, 関東弥生式土器, 向ヶ岡貝塚の土器並に所謂諸磯式土器に就て」『考古学雑誌』20-2
沼津市教育委員会 1989『豆生田遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第44集
沼津市教育委員会 1990『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』沼津市文化財調査報告書第51集
比田井克仁 1981「古墳出現前段階の様相について」－南関東地方を巨視的に－『考古学基礎論』3
比田井克仁 1993「山中式・菊川式東進の意味すること」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器 第8回埋蔵文化財研究会 論考編』
松本 完 1993a「南関東地方における後期弥生土器の編年と地域性」『翔古論聚－久保哲三先生追悼論文集』
松本 完 1993b「東海系土器の受容と変容－南関東地方の事例について－」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器 第8回埋蔵文化財研究会 論考編』
松本 完 1994「武蔵野台地東部における弥生文化の展開過程」『古代探叢Ⅳ』早稲田大学出版部
水山明宏他 1989『文京区千駄木貝塚他発掘調査報告書』文京区教育委員会
森本六爾 1933「最初の弥生式土器」『考古学』4-2
諸墨知義 1993「小櫃川流域における後期弥生土器について」君津郡市文化財センター研究紀要Ⅵ
和島誠一 1960「考古学上より見た千代田区」『千代田区史(上)』